障害児教育部会

一人ひとりの実態をふまえた支援のあり方

～自立をふまえて(どの子も共に生き，共に育つ)～

Ⅰ主題設定の理由

近年、東山梨地区の特別支援学級数は増えているが、１学級の在籍児童生徒数は、少人数化し、知的・情緒・肢体不自由・難聴・弱視と、多様な障害にわたり、なおかつその程度も重くなってきている。そのため一つひとつの学級が抱える悩みは深くかつ多様化しているのが現状である。そして、在籍・通級及び特別に支援を必要としている発達障害を持つ子どもたち一人ひとりの障害の状況や発達段階、その特性に合わせた支援は、どの学級についても共通した重要な研究課題である。

そこで本年度は、授業実践・学習会・情報交換などを通して、児童生徒の理解と支援方法などを模索し、児童生徒一人ひとりの実態に合わせた支援内容、支援の方法に迫るべく本主題を設定した。

Ⅱ研究の内容と方法

１．研究の具体的な内容と方法

（１）講師を招いて学習会を行い、それぞれの学習内容について理解を深める。

（２）小部会ごと児童生徒の実態を考えた教材研究などを行い、個に応じた授業作りをする。また、小部会ごと、指導主事などを招いて授業実践を行う。

（３）小部会ごと情報交換、実践発表をおこない、障害の理解や対応についての学習会を深める。

（４）各小部会の実践について、情報交換し、共通理解を図ると共に、学習を深める。

２．学習会

（１）知的障害児通園施設「ひまわり」を見学し、「園の成り立ち」「子どもたちの様子」「使っている教具や園の施設設備」「通園するには」「施設内見学」「情報交換」などについて学習した。

（２）日本ポーテージ協会「すこやか教室」の一木麗子先生を講師にお招きして、「ポーテージについて」と題してお話ししていただいた。

３　授業研究

（１）情緒障害小部会授業研究　　ことばの教室　自立活動

「はっきりした言葉で自分の気持ちを相手に伝えよう」

授業者：日下部小学校　丹澤智恵利先生

指導者：県立ろう学校　中込悦雄先生

（２）山梨市知的障害小部会授業研究　国語科「「ともだちに分かるように話そう」

授業者：日川小学校　清水祐子先生

指導者：県指導主事　土肥　満先生

（３）甲州市知的障害小部会授業研究　算数科「誕生日をくらべよう」表とグラフ
授業者：松里小学校　真坂茂子先生
指導者：かえで支援学校　伊波美恵先生

４　小部会研究
（１）情緒障害小部会
（２）山梨市知的障害小部会
（３）甲州市知的障害小部会

Ⅲ　成果と課題

１　成果

・小部会に分かれて研究を進めたので、意見が言いやすく、研究内容に沿った具体的な事例を話し合うことができた。また、少人数の特性を生かし、日頃の悩みや疑問について話し合うことができ、共通理解をベースに、障害についての理解や適切な支援のあり方、実態にあった支援の工夫などについての学習を深めることができた。
・研究授業の折りには、経験豊かな助言者に来ていただき、大変勉強になった。小部会毎の研究授業だったので、参観人数も多すぎず、子どもの負担にあまりならなかったのでよかった。
・学習会では、一木先生からあらためて教師としての姿勢を学ばせていただいた。
・地域の施設「ひまわり」を見学し、内容について知る機会をもてたことはよかった。
・部員一人一人が積極的に授業作りにかかわり、児童の実態に合った授業内容の工夫を学ぶよい機会となった。
・一人一人の実態をふまえた指導・支援をすることによって、子どもたちは意欲的に学習に取り組み、達成感を味わうことができた様子が、授業研究を通して分かった。

２　課題

・仕方のないことではあるが、他の小部会の授業が参観できなかったことは残念だった。
・特別支援学級の担任、交流学級の担任、通常学級の担任それぞれの願いや困り感に充分対応することは、時間的にも、実態が多様であることからも無理ではあるが、少しでもよい方向に向かうよう工夫したい。
・「教科指導部会」「発達障害部会」「進路部会」など、課題テーマ別の小部会を作ったらどうか。
・授業案検討の時にも助言者がほしい
・学級名も特別支援学級になったので、部会名を「特別支援教育部会」に変えてほしい。

（部長　矢崎　よしみ）